

裏山遺跡

(福岡県・筑後市)

調 査 概 報

1966. 10. 1.

筑後市教育委員会

裏 山 遺 跡

(福 岡 県 筑 後 市)

調 査 概 報



目 次

1. 裏山遺跡の発見	1
2. 遺跡の立地条件	1
3. 昭和38年度調査経過	2
4. 縄文早期包含層	5
5. 竪穴内部の構造家屋	6
6. 出土品	7
(1) 石 礫	7
(2) 土 器	7
(3) 丸玉その他	8
7. 結 び	9

裏山遺跡 A. B. E 3 区平面図

裏山竪穴遺跡竪穴断面図

竪穴出土の主要土器

竪穴出土石金礫石錘その他

筑後市南部の弥生遺跡

写 真

発刊のことば

本市大字上北島裏山に古代遺跡が発見された。市教育委員会は、直ちにこの土地を購入し、昭和33年夏から秋にかけ調査を行なつた。翌昭和39年の夏には筑後郷土史研究会々員、八女地方高校生、中学生諸君の汗の結晶ともいうき古代住居3戸が、国道209号線の西200mに復元された。1~3世紀の弥生遺跡が筑後市には広大に分布しているに拘らず、その多くが破壊、煙滅されている現在、この遺跡は筑後古代史の生きた資料として認識を新たにすべきである。

この度、発掘を担当された筑後市郷土史研究会岩崎光氏（福島高等学校教諭）から、調査の結果が報告されたので、印刷に付し、この裏山遺跡の調査報告を兼ね、一般の活用に資するものである。この資料が、本市の歴史を知る上に、又広くわが国の古代文化の研究に寄与することに、役立つことができるならば、このうえない喜びである。

なお本書の発刊にあたり、この調査に多忙の中にもかかわらず、遠路この遺跡に足を運ばれ熱心なる指導を与えられた資源科学研究所和島誠一氏、ならびに現地発掘から本書の発行まで終始尽力をいただいた岩崎光氏に深甚の誠意を表する。

昭和41年9月1日

筑後市教育委員会

筑後市裏山遺跡 低位段丘上の弥生式堅穴

1. 裏山遺跡の発見

昭和29年5月押型文土器（縄文早期5000～6000年前）が、城崎伍一氏の果樹園で発見され、同年12月には九州大学教授鏡山猛、文化財保護委員森貞次郎両氏などによつて遺跡の確認が行なわれた。筆者は発掘調査を行ない、柱穴、敷石垣その他穀粒、波状、山型、格子目文様を施した厚手押型文土器と打製剝片石器、石鏃、石棒などを得た。

その後、毎年中耕に際し記録を続けて来たのであるが、正式発掘が行なえないため、充分な整理報告が出来なかつた。昭和37年10月末、故坂本友蔵氏年来の念願として裏山遺跡の正式発掘が計画され、筑後郷土史研究会の昭和37年度事業として取上げられた。同年11月から38年4月までは八女市亀ノ甲弥生遺跡調査と重なり、また例年のない降雪などもあり、正式の調査を中止せざるを得なかつた。

38年8月初、長崎県多比良町先史遺跡発掘の途次、立寄られた資源科学研究所員和島誠一氏が調査参加を引受けられ、ボーリング、トレンチ、セクションの観察など住居址調査に必要な方法と、認識などについて適切な助言を与えられ、発掘調査に着手した。謹んで謝意を捧げる。

2. 遺跡の立地条件

遺跡の位置は、矢部川中流地域で、国鉄鹿児島本線舟小屋駅の北東1.5K、国道209号線の西200mの地点にある。洪積世末期（約3～4万年前）旧矢部川は激しく氾濫し、安山岩、結昌片岩礫を押し流し、東の鶴田、北西の野町、和泉などに点々と自然堤防、又は礫の推積層を残した。その後阿蘇火山灰を母材としたロームが堆積した。その厚さは凡そ1m10である。表土より黒色火山灰土壌（30cm）、黒褐色漸移土壌（27cm）、淡黄色ローム（60cm）その下層は砂質土壌（47cm）、基層は礫となつている。

このように形成された地層の拡がりは東西1km、西北600mの長方形、低位段丘で現在の矢部川の北岸舟小屋温泉から北に続く尾島部落に見られる所謂尾島壤土と呼ばれるものである。本遺跡の北隣下段に位するこの水田も、この尾島壤土の続きである。九州農業試験場菅野博士の調査によれば「暗褐色マンガン斑が多く、母材は火山灰を主としているが、これは再積性のもので結昌片岩の小礫を含み粗砂をも含む。即矢部川沖積物を混入している」となつている。

以上により明らかなように本遺跡の基盤たる尾島壤土の形成期は、洪積世末期から沖積世への漸移期が中心であり、旧矢部川の一分流が緩やかに流れ始め、沼沢地がその周辺に広く拡がっていたことが推察される。

縄文早期（5000～6000年前）に、住みついた人類は北側の段丘下の湧水又は矢部川の流れを利用したものと考えられる。この湧水、分流の利用は第2次に堅穴住居を設定した弥生中～後期

(約1900年前頃)も同様に行なわれ、矢部川周辺の低湿地では、恐らく農耕水田稲作が食生活の重要部門となっていたのであろう。そして矢部川本流が現在の流路をとるようになったのは古墳後期(1400年前と推定)に入ってからと考えられる。(注1)弥生中期から終末期にかけての遺跡、住居址は、八女市から筑後市にかけて拡がり、特に本遺跡を頂点にした西北西約2kmを底辺とした正三角形地域は密となっている。尚最近筑後市立水田小学校南上北島の小台地(高度9m)より、高さ11cm、肩部に直線と孤状文を施した板付式土器の出たのが注目される。

本遺跡内部には拳大又はその倍大の安山岩礫が約40~80個ほどが固まりをなして、10カ所程点在し、表土下30cmの層から、深い所では80cm面に見られる。この礫は表面が削磨されて居たり、または剥げて、崩れ易く、赤鉄鉱の検出されることから火を受けていることは確かである。

(九州農業土壌部検出)恐らく押型文土器を使用した縄文早期に持込まれ、第2次竪穴住居設定の弥生末期にも再びこれを使用したものであろう。

3. 昭和38年度調査経過

8月3日(金)晴 岩崎 光氏

和島誠一氏と遺跡調査方法について打合せ、表土に出ている弥生式土器と縄文早期押型文土器との層序関係を明確にするため、南壁に沿って東西に巾1mのトレンチを入れる。また東西に1m間隔に線を引きボーリングを行なつて、ローム面の高低検し、トレンチのセクションと対比する必要がある。

8月4日(日)晴

和島氏、長崎県国見町多比良先史遺跡調査のため現地を離れる。

岩崎光氏 羽犬塚中学三年岩崎、清水両君遺跡の整地を行なう。

8月5日(月)晴 岩崎光氏 羽犬塚中学岩崎逸男君

東西の西端に枠を作り、1m間隔に糸を引き、発掘に先立ちボーリングを試みた。岩崎常明君セクションを記録する。

現状に於ける裏山遺跡の所見

- ◎安山岩、円礫、赤く焼けた敷石又は、組石炬と思われる拳大、その倍大又は両面のすれた石が見られる。
- ◎黒燿石、サヌカイト、珪石等の石屑又は石器と思われるものが分布している。
- ◎柱穴が認められる。
- ◎住居のプランは、長方形の竪穴らしい。
- ◎表土は火山灰質黒色土で、30cm又は所によつては40cm以上の厚さを示し、その中に縄文早期の押型文土器が見出され弥生薄手の刷け目文様のものが最も多く、土器を通じて、縄文早期、前期と弥生後期の生活の関係を把握しなければならない。

以下要約することとする。

8月15日(晴)筑後郷土史研究会々員木本恵一郎氏の助力を得て南境に沿い、東西に巾1mのトレンチを入れた。その下部の変化はどんなになつているのであろう。西端より1m50までの間は表土は柔く70cmでローム層に達し、その東5mの地点ではローム層が表土下35cmまで上つて、50cmの固い焼土のブロックがあり、そのブロックから以東5mの間は柔く掘り動かされた土が、表土から80cm以上も下つて居り、最東端2mは、ローム層が上つていることが判明した。西より約6m50までをA区、次の中央部をB区、東部をC区とし、各々を北に拡張して掘り下げた。A区に於いては南壁は最上部6~7cmは帯褐色有機土、黒色表土約30cmの下に第1包含層を辿ることが出来る。即ちこの層に弥生式土器片、縄文式押型文土器片が混在している。更にその下の15~20cmの間に第2層がある。この第2層はトレンチの西南角から東2mの北東隅で斜走し、その北半は周縁からの崩壊土が落ちこんで居り、床は表土下約70cmにあることが分つた。このようにして竪穴I号の南壁とその北側の床面を8月末に表わすことが出来た。この際竪穴I号が、弥生末期に属するものであることが、床面に密着して出土したまり(食器)によつて裏付けられた。押型文土器の破片は南壁地表下45cmの第2層と床面の両方から5・6片出土した。

次にトレンチA区南壁のf点(西南角より東2mの地点)から、北北西にefのセクションを作つた。これにより、竪穴1号の西の柱穴(径20cm、深さ1m5)とその周辺の土器の重なり工合や、第1第2第3の3層を明らかに出来た。

竪穴I号の南壁は東北東、西壁は北北西に向つて長方形の竪穴であることが分つた。8月末には竪穴1号の南東床面には厚さ8cm東西1m20、南北65cmにわたるロームブロックがあることを見出した。ここは鮮かな黄褐色で焼けていた。相当の高温で金属を熔融出来る程度のもので推定された。その中に径10cm、8cmの柱穴状の穴とその他5個の碗状凹みがあつた。炉であることは確かである。この炉址の北隣の床面からは高つきを出している。

竪穴1号の南東外壁ロームは、東に隣接する竪穴2号の西外壁ローム土を使用したものであることが分つた。トレンチ1の北の東西線abcdによるセクションの他、竪穴1号と竪穴2号との関係を明らかにするために東西のトレンチに対して直交する南北トレンチ(g h・i j線に囲まる)を掘つた。この断面を考察すれば、竪穴2の床面は地表下80cm以上に及んでいるが、竪穴Iの外壁がIIの西外壁を動かしている状況から、竪穴1が後で築造されたことが明らかである。

9月上旬から竪穴1号の中央部をほぼ東北東、西南西へ走るk l線の断面を西から記録した。福岡西新町式弥生式土器に相当する弥生末期の浅鉢、高杯壺の他黒曜石石鏃、石膏、サヌカイト屑、鉄片などが出土した。

竪穴1号の北半は9月中旬から床面を出し東の棟持柱と、その西隣の炉が現われた。10月初めには竪穴1号の北東部に床面より25cm以上も高く東西の巾1m20、南北の長さ1m80の一区があり、これは坐臥の場又はの寝台として利用されていたのであろう。

竪穴Ⅱ号の輪かくは、10月初、はつきりできた。トレンチのB区は竪穴Ⅱ号の南壁の北に沿うて居り東西6m50の間は床面が地表下85cm以上も掘下げられていた。この竪穴Ⅱ号の東側にも東西の巾1m20、南北の長さ3m65にわたり、床面より10cm乃至15cm高い坐臥や睡眠に利用したと思われる高い部分が見出された。竪穴は住居が2層となっていた。下の床面をaとすれば、その上に3~4cmの灰黒色の有機土が挟まり、その上にロームの2~3cmの床が張つてあつた。これをⅡbとする。ⅡaはⅡbより狭かつた。10月7日から10月末までの間、硝子製の青、緑色の丸小玉17個をⅡb床面及びその寝台と思われる東すみの高い地点から出し、竪穴Ⅱbの広さが確定できた。

11月2日以降、竪穴Ⅱbの南限を明らかにするため東西走のトレンチから更に南1m、隣接畑との境界ぎりぎりまで掘り上げた。最後に竪穴Ⅰ、Ⅱとの関係を、もう一度交つている地域で考え竪穴ⅠがⅡより新しいとした。また竪穴Ⅱに続く東側では表土下30cmからローム上面まで縄文式押型文土器の包含層が東西巾2m南北長さ3mに亘つて拵がつていた。

11月3日(日)晴

午前 作業人員 和島誠一 岩崎 光

岩崎暢熙(久留米大学)、岩崎逸男(羽犬塚中学)

1. 竪穴Ⅰの東南部の床面調査。
2. 竪穴Ⅱの西南角の第1層の焼土ブロックを除去する。
3. 竪穴の南境、Ⅱaの床面の整理。

午後2時より4時半まで

- 岩崎逸男君竪穴Ⅱ中央炉の南東にて丸小玉ナンバー17を出す。
- 九州大学助手小田富士雄、学生石松、宮小路三氏、熊本県三島格氏の助力あり。
- 石松、宮小路は竪穴Ⅰの南東部の炉の形をきれいに出す。
- 三島は竪穴Ⅱの東隣接、地表下35cmの押型文土器単純出土地点を出してもらう。
- 小田、岩崎は竪穴ⅠⅡよりの出土の土器型式、北隣接の地表下20~30cm出土の土器型式を検討する。

昭和38年11月6日(水)晴

作業人員 和島誠一、岩崎 光 岩崎朝子(黒木高)

午前10時より

筑後市役所建設課2名に測量依頼。北北東400m国道209号線の西上松基点より高度を出し1/2の平面図を作る。

11月7日(木)晴

作業人員 和島誠一 岩崎 光

午前9時半より午後5時まで

和島、岩崎で竪穴Ⅰ、Ⅱの輪かくとセクションの点、竪穴Ⅱの南炬を実測、補充した。岩崎はその後、地区3の南東から巾50cmの竪穴Ⅱの南東角を通り、竪穴の南東壁を通過している溝を掘る。

午前11時

筑後郷土史研究会員右田乙次郎氏。調査庶務連絡打合せのため見える。

和島氏より

1. 記録の整理。
2. 上屋の形式は切妻造なること。
3. 土器の考察。
4. 土器の整理。

について助言を与えられる。

午後7時半、和島氏帰京。

4. 縄文早期包含層、竪穴Ⅰ・Ⅱ・三者の相互関係

本遺跡の押型文土器包含層は既に述べたように黒色火山灰壤土の表土下30~40cmの地層の間に多く見出される。押型文土器は多く穀粒文をつけているが、縄文早期の中、新しい(約5000年前)ものと考えられる。北西縄文土器片多出地では、これより古いとされている押型文土器片が見られる。これは竪穴Ⅱ、竪穴Ⅰの周壁の外側の表土下ローム層上のレベル、当時の地表を示している。また、これら押型文土器は竪穴Ⅱa、Ⅱb、竪穴Ⅰの床面からも出るが、特に各竪穴の周壁部から1m以内の地点で多く採集された。これは割合に浅い縄文早期の包含層が、竪穴の周壁として盛り上げられたためで、この付近に残されたと考えられる。

弥生末期(約1700年前)第2次的に上の生活面を約50cm(現地表下85cm)掘下げ、東西5m、南北3m90の長方形の竪穴Ⅱaが設定せられた。竪穴Ⅱaの柱は間隔2m20、東のは径26cm、西のは28cm深さはそれぞれ床面から45cm、35cmあり、この竪穴の中央に、炬が設けられた。炬は東西43cm、南北40cm深さ25cmで、長さ約15~20cmの楕円形の安山岩で囲まれ、炭屑、灰を間を含み、凹穴の底部及び周辺は堅く、赤褐色に焼けていた。南には東西1m、南北51cm、深さ25cmの長方形の凹地があり、中心は深さ35cmある。炭屑と長さ20~35cm大、長楕円形扁平な安山岩が東側に、5個置かれていた。砥石、石■のようなものがあるので調理場と考えられる。竪穴Ⅱの高い部分(寝台)は、竪穴の北西部に東西1m70、南北2m20の1区劃をなして高く掘り残され坐臥として用いた。東と西に径13cm、10cmの柱穴がある。炬の西縁には厚手のかめと、まりが置かれていた。

次に竪穴Ⅱbは、Ⅱa上の薄い2~4cmの灰黒色有機土を覆つて2~3cmのロームが張られ、北縁部は5度の傾斜で上り、薄くなつて消えている。竪穴ⅡaからⅡbに移行した時、竪穴は北方と東方へ拡張され、柱穴も移動した。東への拡張地域は寝台となつた部分で、巾1m20、長さ3m65で、床面より10~15cm高く、外見上、明確に台形を残している。竪穴Ⅱbの南外壁は、

本調査地の外側となり、図に示されているように南東部は巾1 m、深さ59cmの溝が横切っている。これは弥生集落の環壕の一部が表われているもので、東北東から西南西の方向で走つて、隣接の葡萄園に続いている。そして葡萄園を過ぎ、東北東矢部川低温地に通じている排水溝であろう。

竪穴Ⅱ bとⅡ aとの重なりは、上、下の関係にあり、両者の間に挟まる薄い有機土の拡がり、は、竪穴Ⅱ aの最小限度の拡がりを示すことになるわけである。北西壁に近い部分は、有機質は含まず、長さ1 m40、巾80cm、高さ40cmほどのくずれ落ちたロームがあつて、それがまた竪穴Ⅰの東外壁をなしていたと思われる。また竪穴Ⅱ aからⅡ bに拡張した際、北側に巾60cmから80cmの張出しが行われた。ここには3個の凹穴が掘られてあり、中央の穴には完全に近いかめが、中に入れたまま放置されていた。

前にも述べたが、竪穴Ⅱ aとⅡ bの簡明の識別は、Ⅱ b床面に現われた丸小玉の拡がりによつても区別される。すなわち丸小玉は、竪穴Ⅱ b床面と東の寝台上から見出されたのであつて、この点からⅡ aの時期には東の寝台は設けられていなかったことが、明確である。

次に竪穴Ⅱ bと竪穴Ⅰの関係を考えると前述のように、竪穴Ⅱ bの西壁は竪穴Ⅰが設けられた時に、けずりとられており、竪穴Ⅰの東外壁はⅡ bの西壁に沿つて崩れ落ちたロームを用いていた。竪穴Ⅱ bと竪穴Ⅰの交叉地域では、竪穴Ⅱ bとⅠの床面の高さの上、下関係は殆んど不明であるが、ここから離れて中央に行くに従い、竪穴Ⅰの床の高さより竪穴Ⅱ bの床の高さが10cm程深いことが分る。すなわち中央部では前者は、高度10m75、後者は高度10m64である。

以上によつて竪穴Ⅱ bをこわしてから竪穴Ⅰを設けたことが明らかである。

5. 竪穴内部の構造家屋

竪穴Ⅰの主柱である棟持柱は東、西に2本あり、間隔3 m60、東柱はその周縁を30cm掘り下げた。凹穴は東西50cm、南北90cmにわたり、この穴に続いて西隣に東西60cm、南北50cmの凹穴が続いて15~25cm大の安山岩礫がとり囲んでいた。柱の径は25cm、底は床面より40cm深かつた。西柱は径28cmで床面より底まで53cm、周囲は東西90cm、南北80cmを深さ20cmに掘り、さらに柱を中心に径50cmに円く深さ37cmに掘っている。この二の主柱は周囲の形状が樹根で多少壊われ、変形しているが、大体家屋築造の際に掘られたものと考えて差支えあるまい。上に述べたように両方の柱とも、外側を凹穴が囲んでいた。その周縁部は安山礫及び壺、高杯、浅鉢が重なり、有機質土壌がつまり、炭屑が点在していた。この柱の間はふみ固められており、居間の中心部であつたことが考えられる。土器には壺(N20、N21)、浅鉢(N98)、高杯(N19、N100)などがあり、黒耀石、石英の石屑などが10cmから15cmもある厚い黒色有機土壌の間から出土した。

前述の通り竪穴Ⅱ aの東西両柱は東のは径26cm、西のは径28cmで間隔2 m20、深さ各々は45

cm、35cmで東西5m、南北3m90の長方形プラン、北西に巾1m70、長さ2m10の寝台と考えられる床面より高いロームの地域が見られた。Ⅱbは東にⅡa床面より10cm以上の高い台地巾1m10~20、又北方には約50cmを拵げてつき出した。そのため竪穴は、東西は6m20、南北4m40の長方形のプランとなった。柱もⅡaの東柱より東南東へ80cm移動し、西柱は柱穴だけの長さ北に寄った。従つてⅡbの上屋はⅡaのそれより東西に長くなつて居り、又高くなつたわけである。

竪穴Ⅰは柱の間隔3m60、柱の径は25、28cmで柱の底は床面より40、53cmの深さにあり、東西6m、南北3m60で、これまた大規模な長方形の竪穴となった。西柱の太さは堂々たるものである。小柱は4隅の他中間にも全部で8本はわかつた。以上竪穴Ⅰ、Ⅱは弥生末期の家屋の例として棟持柱2本を主柱とする切妻造が想定され、筑後地方の原始古代住居が明らかにされた。それは家型埴輪や石人山古墳の家型石棺に見られる豪族階級の住居の形式と通ずるものであると考へていい。

6. 出土品 (一) 石 礫

この遺跡の西隣の果樹園にはサヌカイト大型剥片、205個集つて出た黒耀石塊、石鏃、石屑安山岩礫利用敷石、石錘、石棒など石器類はバラエティに富んでいるが、今回調査には、石器関係と見られるものは稀で、石屑が多く、石鏃5個石錘2個、局部磨製石斧1個石庖丁片などが出た。

(写真3)

石鏃は縄文早期押型文土器に伴うものと、竪穴Ⅱ、Ⅰの弥生末期に伴うものに分けられる。竪穴Ⅰの外壁の北東縁、東柱穴の東凹穴斜面、竪穴Ⅱ中央炉の西南60cmから出ている石鏃3個は、黒耀石製で柄につける部分はかり股をなし、鋭利である。これは縄文早期に相当するものと推定される。竪穴Ⅱの西南と南炉の北縁からは、サヌカイト製柳葉型のもの3個他破片数個が出ているが、弥生末期に相当するものであろう。

(図面5)

右の他竪穴Ⅰの西壁近くの第Ⅰ、Ⅱ層及び床面東壁近くの第Ⅰ、Ⅱ層及び床面、竪穴Ⅱの南壁近くの第Ⅰ、Ⅱ及び床面に多数の黒耀石、少数の石英石屑を含んでいる。竪穴Ⅱ東隣表土を除いたローム層上、竪穴Ⅰの北東、北西、南壁には黒耀石石屑が多いが、これらは何れも押型文土器と共存して縄文早期のものと考えられる。その他焼かれている局部磨製石斧、石錘は縄文期に入れ、石庖丁は弥生期に入れるのが普通である。

(二) 土 器

竪穴Ⅱ、Ⅰの周縁及び外壁に近い竪穴内部床面に押型文土器が出ている。(写真4) 竪穴Ⅱb東隣では、地表下35cmに単純出土地域がある。文様は穀粒文が多く、山形文が稀に出ていた特に大穀粒文は大分県国東半島早水台、香川県小高島、和歌山県田辺市高山寺出土の押型文土器と文様が共通して、瀬戸内海域と東西交渉のあつたことを示すものであろう。(約5000年前

と推定される。) 竪穴Ⅱの上層の攪乱された土と、その北縁からは約1900年前の弥生中～後期以降の土器は物すごく多いが、縄文期関係の破片は割合に少ない。その中で径20cm、高さ25cm、厚さ8mmと想定される押型文土器(西隣地域で出土しているものから推定出来る)の壺片が出ている。

次に弥生式土器について述べると、平頂形の突帯(下底の巾2.4cmの梯形)に刻目が施されている中期土器片、(図4の2) 弥生中～後期の型式と思われる壺底片は、本遺跡の北西部から出ている。竪穴Ⅰ、Ⅱから出た弥生末期の主なるものをあげてみよう。竪穴Ⅱaの南炬の西辺から出た2個のかめ、まり(椀のような食器)がある。竪穴Ⅱbの北壁に近い中央凹穴から出たかめは、Ⅱaの南西から出たかめと型式は、ほぼ類似しているが、前者は厚手で底が広いⅡaとⅡbの時代の差を示すものであろう。(図4の78) 竪穴Ⅱa出土の底部が外側に向つていくらかふくらんでいる土器片は、西新町式で弥生末期に属する。竪穴Ⅱb、竪穴Ⅰも、福岡市南部雑餉隈、全市西部西新町より出土した土器形態と軌を一にしているので、竪穴Ⅱa、Ⅱb、Ⅰと弥生末より終末期の順序で編年される。竪穴Ⅱb、竪穴Ⅰ出土の中には土師まで下るとと思われる(NO.100) 高つきもある。(図4の11・12) その他竪穴Ⅱ、Ⅰで確認出来た壺、かめ鉢、まりなどもある。(図4の13) その他床面の上層又は表土に近い攪乱層より西新町式に入る壺、かめ、高つき、長首かめの破片が多く出た。押型文が今後の調査予定地の北、西、東の周縁部に固まつて出るとは、縄文早期と弥生中～後末期の住居の重なりを示すものとして注目すべき問題を持つている。

弥生中期の型式を残す突帯のめぐつているかめ、土師器に入る脚部にすかしを持つた高つきなどを考え合せて、裏山遺跡の弥生時代の上限と下限は2世紀から4世紀にかかるものと考えられよう。以上の如く西新町式土器が多いが、本遺跡独特のものも近い将来検出される可能性があるのではないだろうか。

(三) 丸玉その他

10月7日、九州大学院生久保山教善氏が竪穴Ⅱの中央炬の南西80cm、Ⅱbの床面から直径3mmの青緑色の丸小玉を発見してから、発掘終了まで平面図に表わしたように17個の丸小玉が出た。材質は硝子で大塚より輸入したものであろう。鉄片は竪穴Ⅰの北壁、東壁近くの床面から出ている。

7. 結 び

筑後市裏山遺跡は洪積世末期 約30000年前、旧矢部川の低位段丘の安山岩を中心とする礫層が堆積して自然堤防が出来た。現在高度10m。その上に再積した阿蘇系火山灰土壌。そこに東西100m、南北70mに及ぶ縄文早期(約5000年前)の集落が出現した。当時北を流れていた矢部川分流は台地の辺縁にある湧水と共に、川では漁撈、周辺の台地では狩猟が行なわれていた

時代、これらの水は、生活に必須の飲料水として利用せられていたのであろう。又黒燐石、石英製の石鏃、打製スクレーパーなどは狩猟用具を物語り、石錘は漁網として用いられたのであろう。焼石は炬を囲み、黒色有機質土はよし、あしなどの敷かれた跡を意味するのであろう。これら5000年前の縄文時代集落が自然的原因か、人為的原因で此処が廃滅に帰した後弥生式中期末(約1900年前)再びここに居を構え、生産場を設けた。北及び西の矢部川に沿う低温地で水田農耕が営まれた。多数の食器や貯蔵用壺、高つきは、これを物語り、堂々たる切妻造の住居は、この大集落のリーダーの出現を示すものである。裏山集落の北西隣の筑後市水田区一帯には中～後期の集落が拡がっていたのであつた。

竪穴Ⅱ及びⅠに示された坐臥用台地付の規模雄大な長方形プランは九州地方では最近弥生中期から後期に相当する熊本県玉名市下川原遺跡(玉名高校田辺哲夫)、筑後地方では福岡県三井郡小郡町南崎(九州大学久保川教善)が発掘調査され型式が類似している。坐臥用台地を持つている古墳時代の同型式竪穴住居は埼玉県五領遺跡で学界に紹介されている。上屋が切妻造であることは、家型埴輪などと類似して弥生中期以降この型式が衰われたことに重要な意味を持つ次第である。

また竪穴内部から硝子製丸小玉17個を出したということは、筑後、八女地方では最初のことであるし、この点から、大陸との交渉を考慮されることになる。竪穴Ⅰから鉄片2個を出している。

問題に残る焼石は縄文早期に炬組、又は敷石として使用したが、その後第2次弥生中期以来の住居内部にも用いたと考えるのが当を得ているであろう。

日本原始古代史の問題の焦点たる邪馬台国の卑弥呼出現前後に相当する遺跡は、筑後川以南特に筑後市南西部に広く発見されているのである。裏山遺跡の弥生式住居の規模、型式は従来論ぜられ又予想されていたものと異なるものがある。尚弥生式集落の環渚は福岡市比恵遺跡など、すでに報ぜられているが、裏山遺跡では集落の内部をほぼ東北東から西南西の方向を以つて、4条以上のものが通過している。この東西300m南北70m以上に及ぶ大集落は周辺の集落とも関連があり、この中に族長と言われる権力者が居たのであろう。昭和37年夏から38年初にかけて行なわれた八女市亀ノ甲遺跡調査に於て弥生初、中期の集落と弥生中、後期の墳墓群を詳らかに出来た。今次の調査を含め、八女、筑後地方の原始古代の住居址、集落跡の貴重であることを切実に痛感した。第一次の調査の結果竪穴Ⅰ、Ⅱのプランとその上屋の形態を復元出来たことも大きな収穫であつた。昭和41年8月初以来弥生中～後期の長方形竪穴5号を発掘し床面より出た土器、石器、丸小玉など計測復元中であるが、この結果は近日追加することとする。

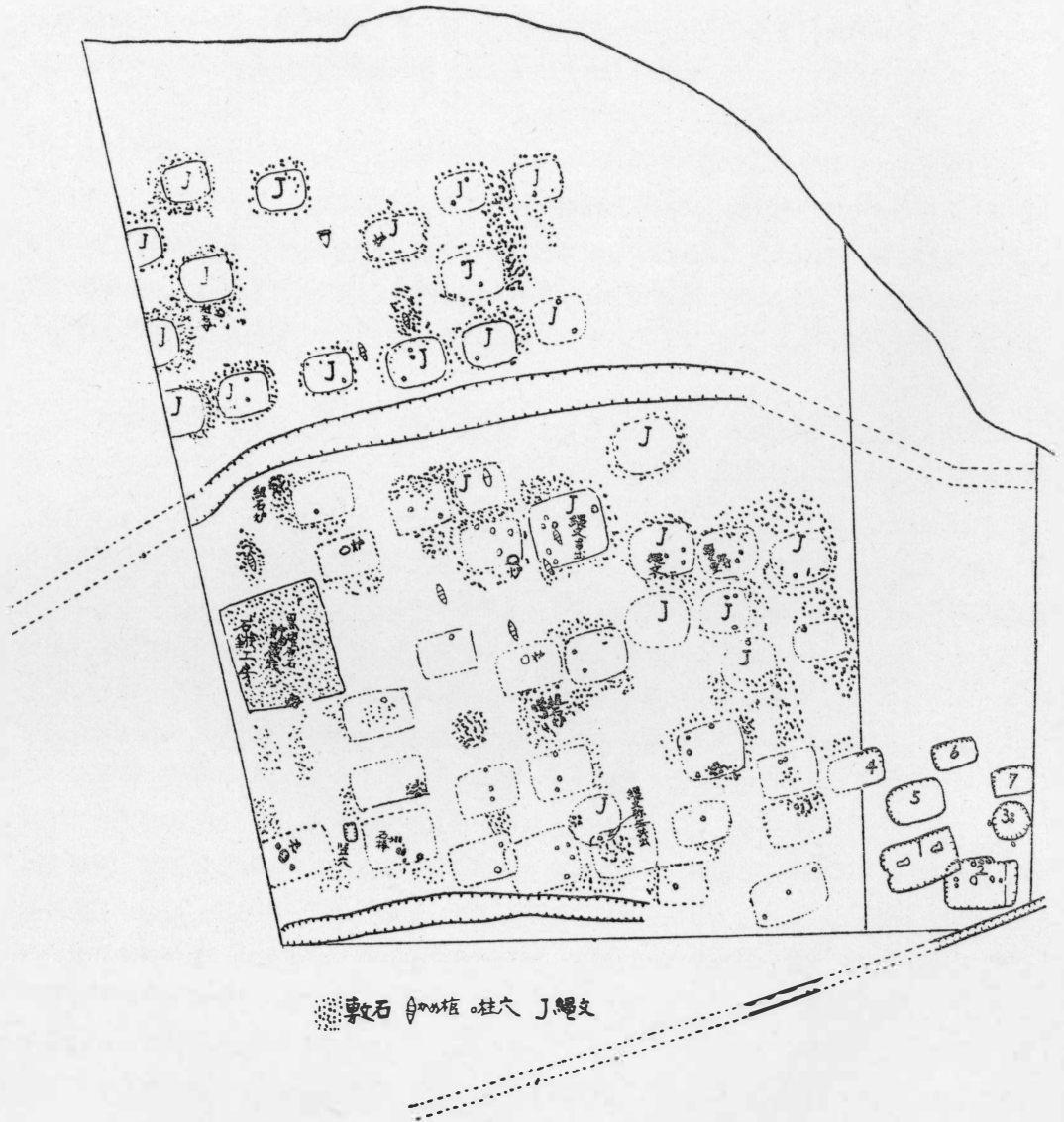
参 考 注 1. 「八女市上妻弥生後期の集団墓地」

文 献 2. 八女史学1号「筑後市裏山遺跡中間報告」

3. 福岡県高校歴史部会1号「裏山遺跡調査報告」

4. 八女市教育委員会「亀ノ甲遺跡」

裏山遺跡 A.B.E 3 区平面図



1:600 図1

裏山 豎穴 遺跡

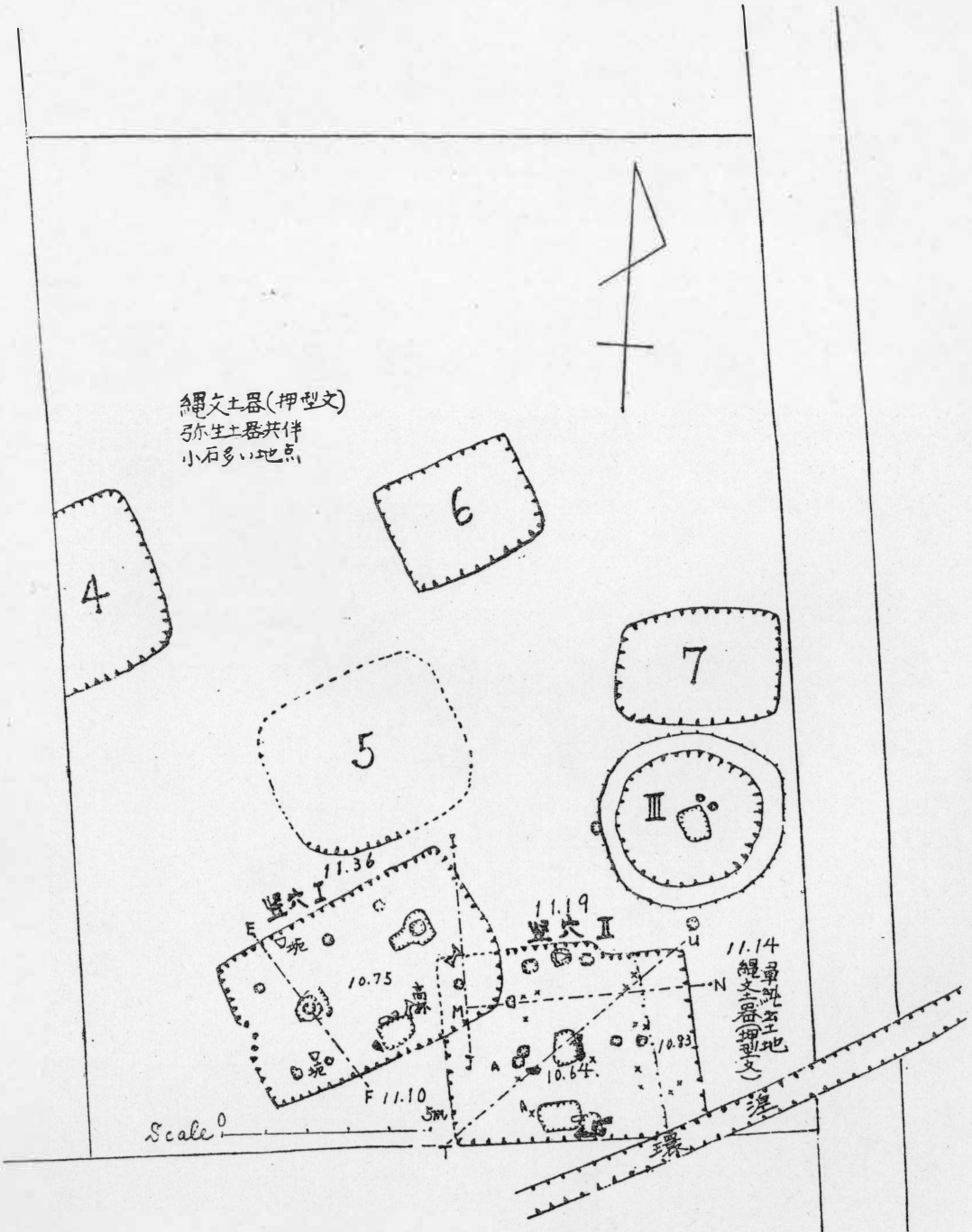
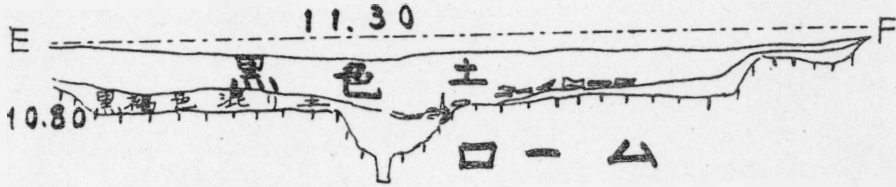


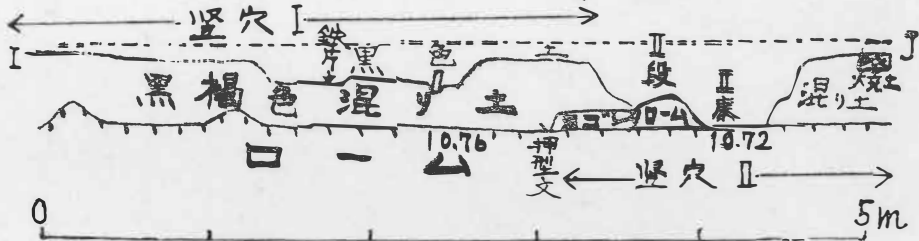
図 2

豎 穴 断 面 図

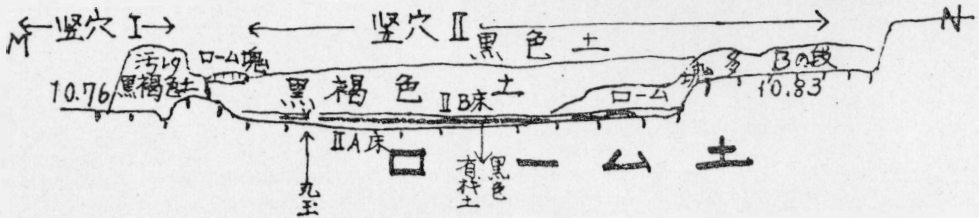
豎 穴 I 西 部



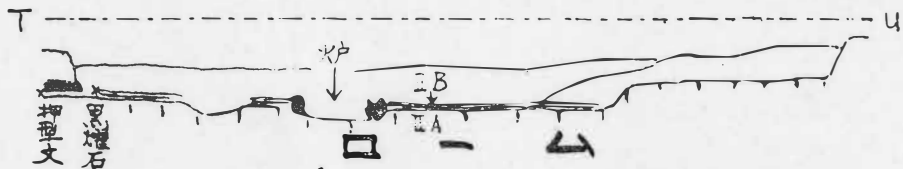
豎 穴 I と II の 関 係



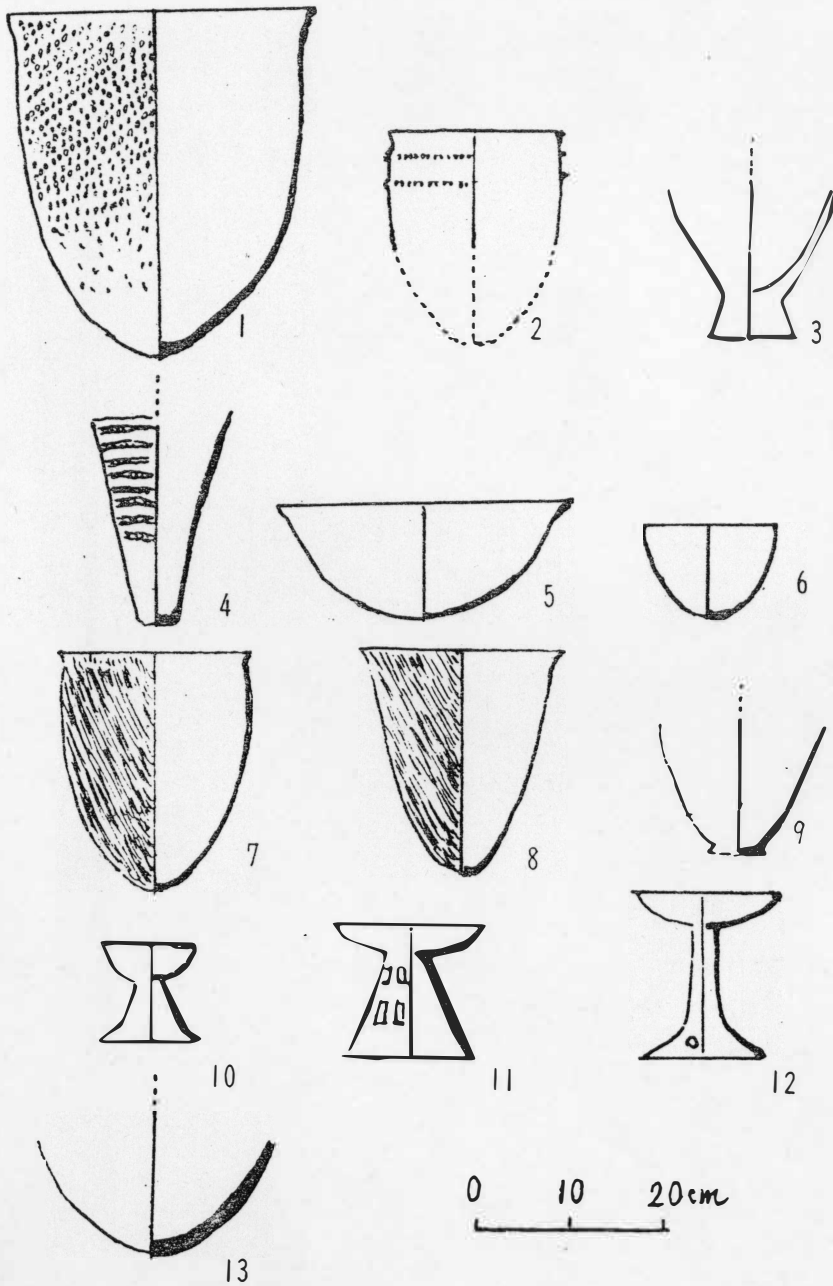
豎 穴 II の A と B の 関 係



豎 穴 II 中 央 部



豎穴出土の主要土器



他その錘石鏃石出土穴豎



黒燧石



黒燧石



石



サヌカイト



石英



黒燧石



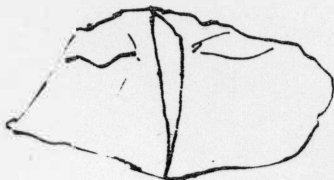
燧石



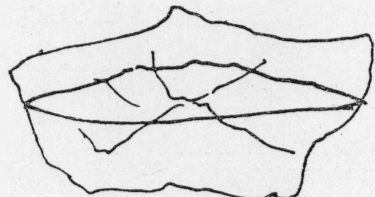
石



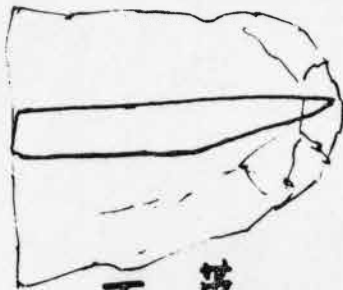
サヌカイト



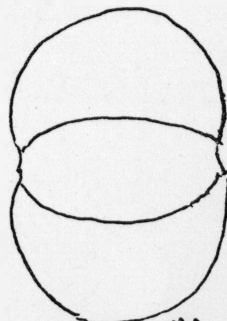
サヌカイト



黒燧石



石英

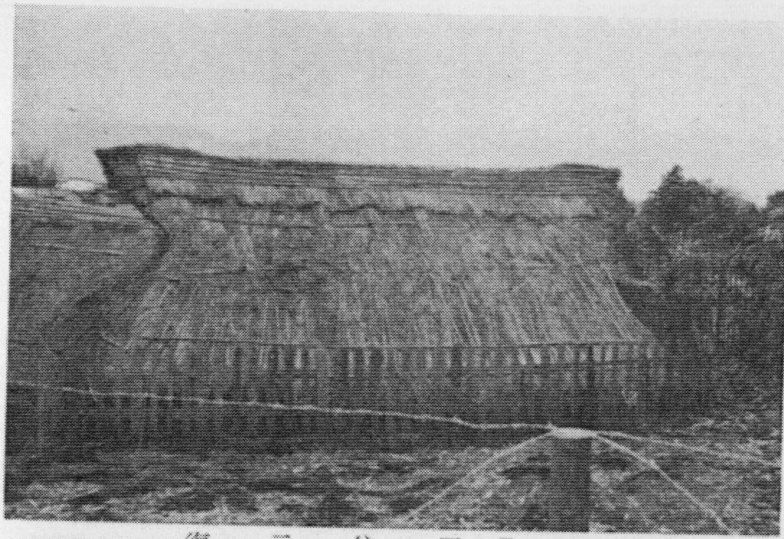


安山岩

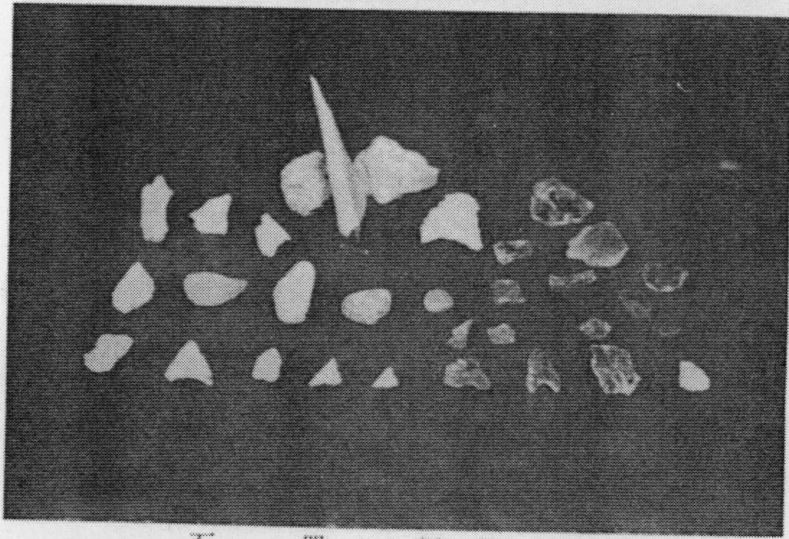
筑後市南部の彌生遺跡

1:20000

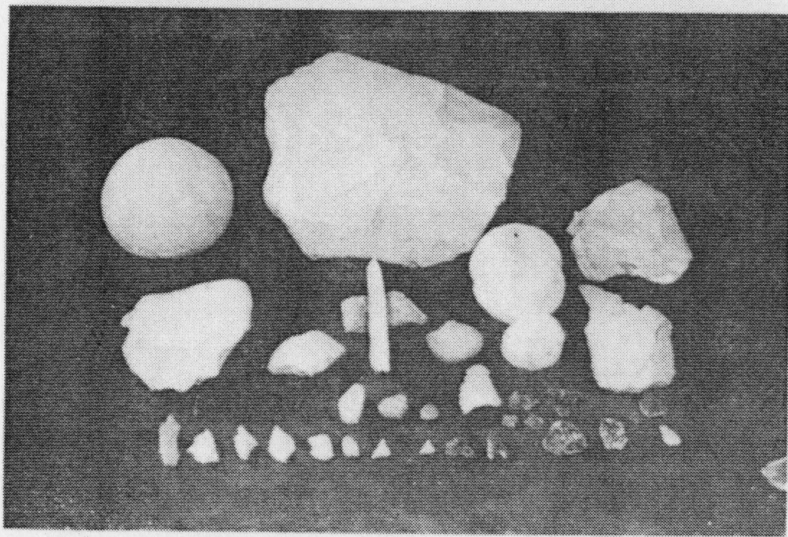




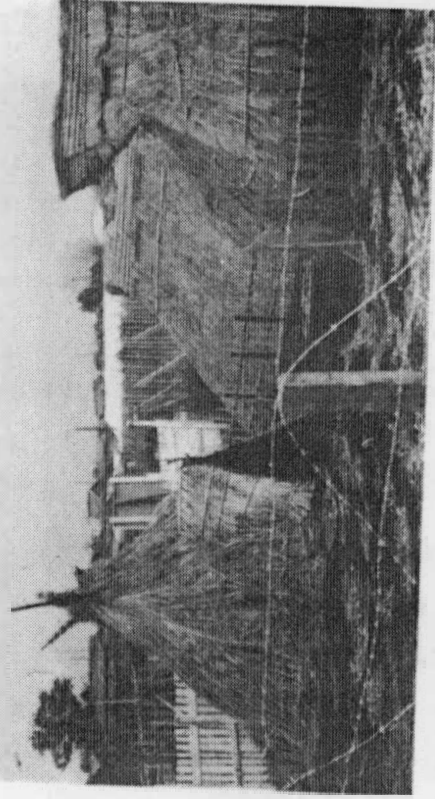
復元住居Ⅱ



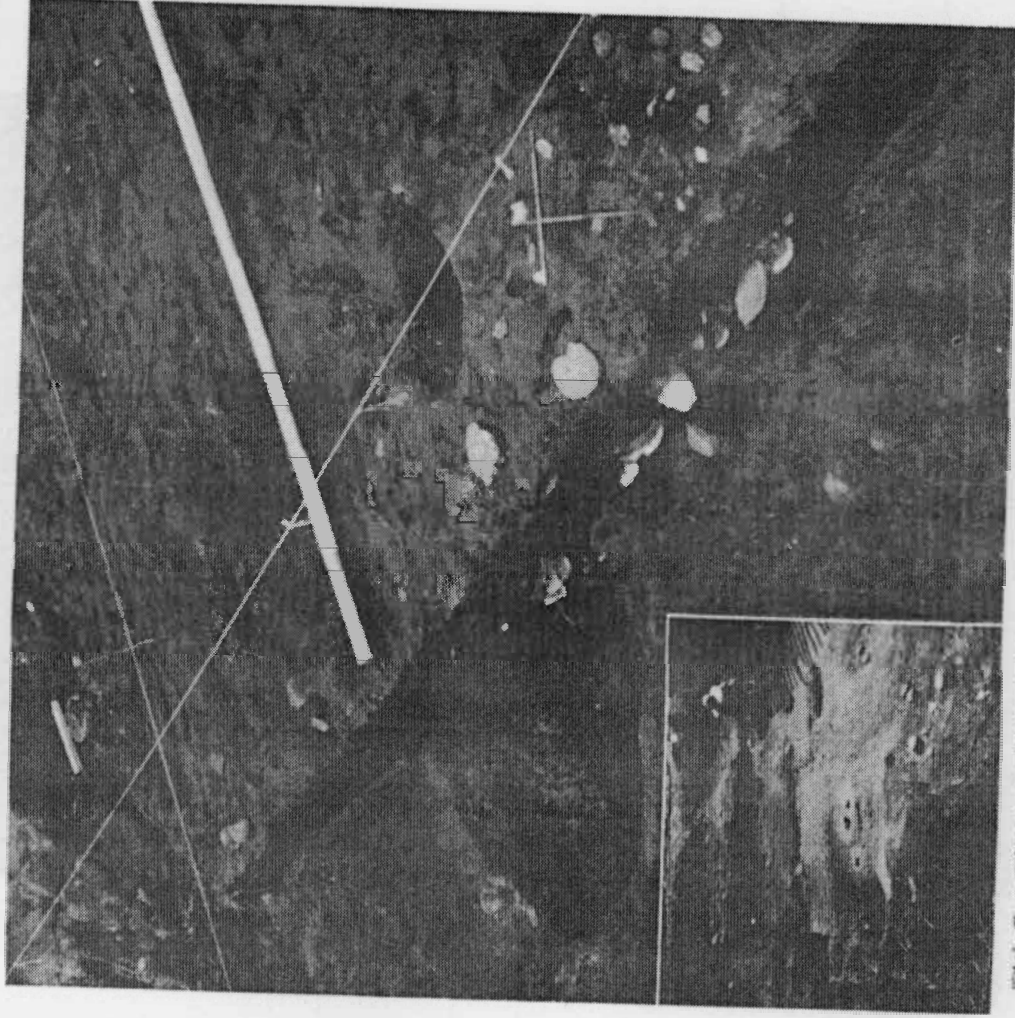
石器類Ⅰ



石器類Ⅱ

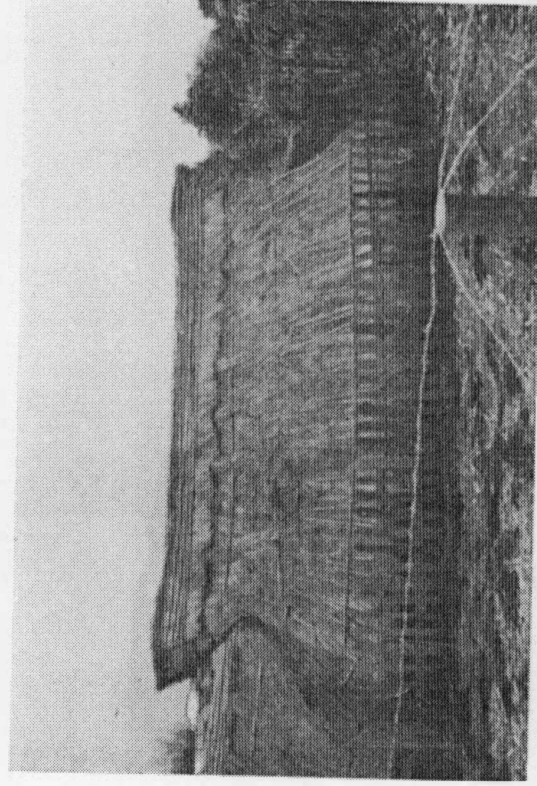


復元住居 I

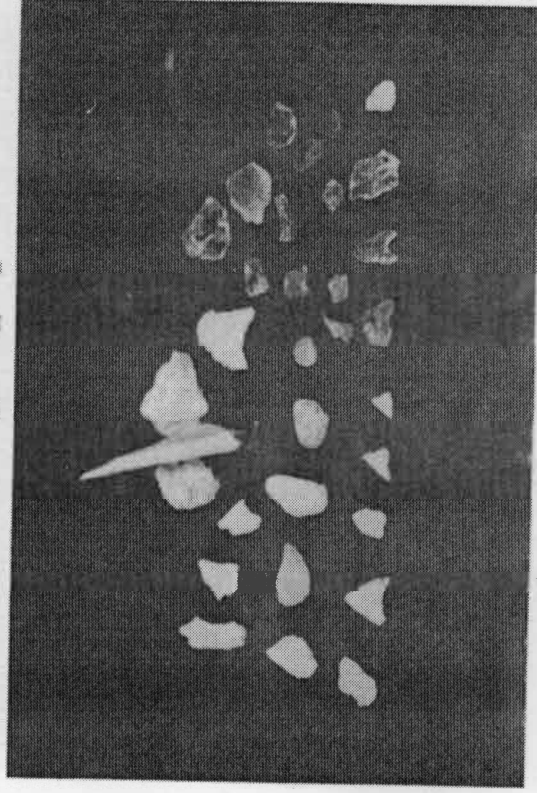


堅穴Ⅱの西側より東側を見る

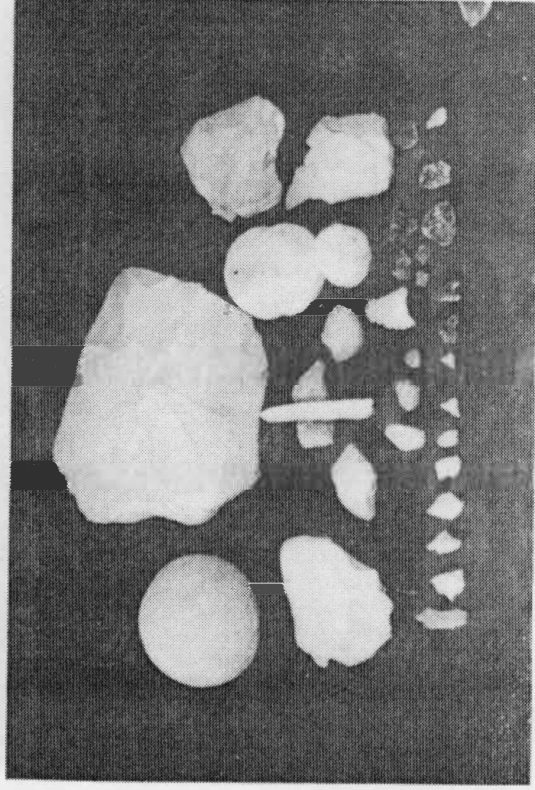
堅穴Ⅰの西柱の西側 ef 線断面図



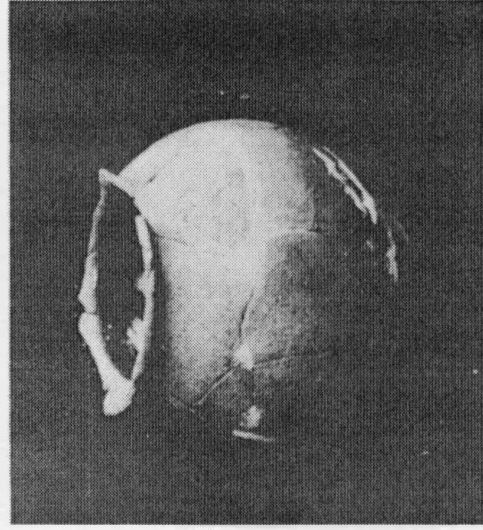
復元住居Ⅱ



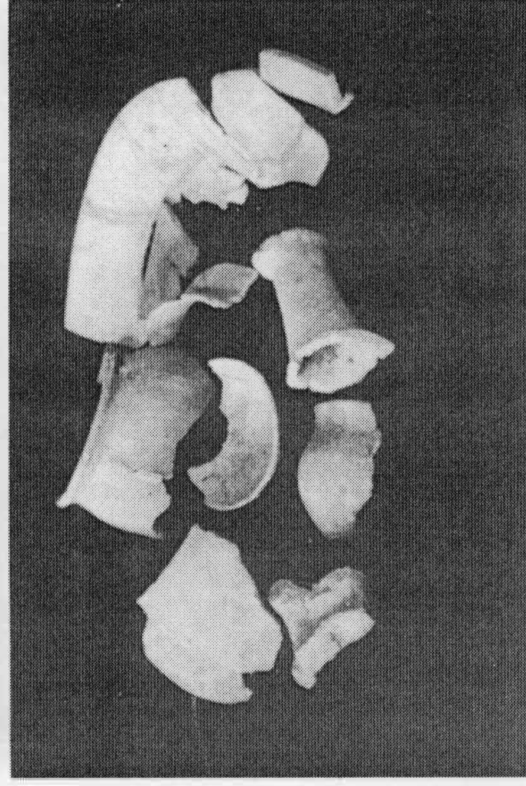
石器類Ⅰ



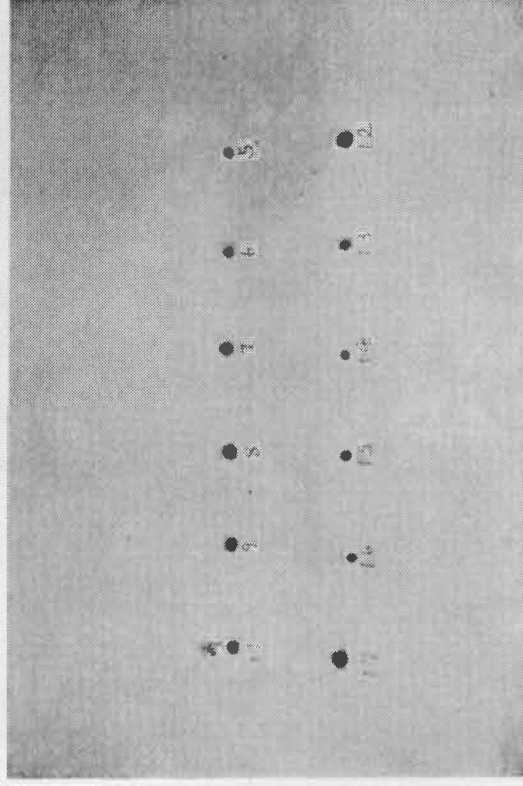
石器類Ⅱ



土器 I



土器 II

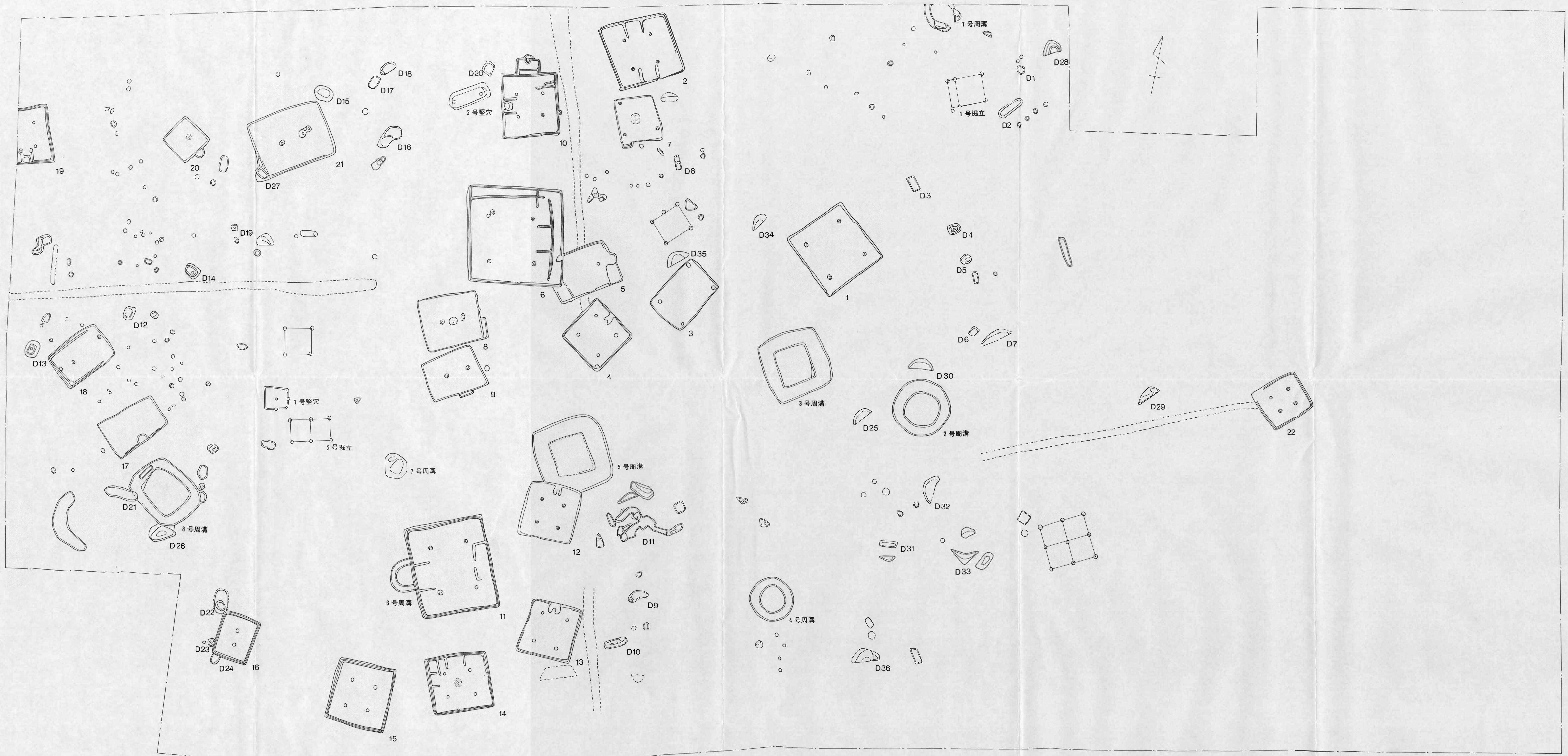


丸小玉



現在の復元家屋＝昭和49年3月20日完成





付図 遺構配置図 (1/200)